



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

37

ヘッセ

車輪の下 辻 理訳

デーミアン 浜川祥枝訳

聖母の泉 山下 肇訳

中央公論社

世界の文学 37

©1963

ヘッセ

訳者 辻 理
浜川 祥枝
山下 肇

昭和38年10月1日初版印刷
昭和38年10月12日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話 (561)5921(代)振替東京34

目次

車輪の下

デーミアン

聖母の泉

解説

年譜

3

151

307

568

582

車輪の下

第一章

取次店主で代理店業者のヨーゼフ・ギーベンラート氏は、町のほかの人たちと比べて、かくべつすぐれたところも、変わったところもなかった。みんなとおなじように肩幅のひろい丈夫そうな体つきをし、お金というものを誠実に心からとうとぶ気持ともあわせて、けっこう人なみの商才をそなえていた。それに庭つきの小さな家も持っていたし、墓地には家代々の墓もある。教会の教えを守る段では、いくらか分別くさくもあり、底が見えずいてもいたが、それでも神さまやお上に対しては、適当な尊敬の念をいだいており、市民的な良風美俗となれば、これはもうその鉄則に頭から盲従するといったふうだった。酒もかなり飲むが、けっして酔いどれたりはしない。副業にはすこしあやしげな商売をやることもあるが、これも公に許されている以上のことをしたことはない。自分より貧しい人のことは素寒貧、自分より金のある人のことは成金野郎と悪口をたたく。町会クラブの会員で、

毎週金曜日には「荒鷲館」での九柱戯の勝負に加わったり、パン焼きの日や、前菜の会や、腸詰スーブの集まりなどにも欠かさず出席した。仕事中には安い葉巻をすい、食事のあとと日曜日には、上等の葉巻をすった。

彼の内的な生活は俗人のそれだった。たとえば心情というような点でも、彼の持っていたものは、もうとつくにはこりまみれになってしまっており、家庭人としての因襲的で粗野な心根とか、息子自慢とか、ときおり貧乏人におごってやる気まぐれとかが、そのせいぜいのところだった。彼の精神的な能力といえ、これはひどく限界のある生まれつきのずるさと、算術の才以上のものではなかった。読むものは新聞だけだったし、芸術鑑賞の欲求をみたすには、町会クラブで毎年行なわれる素人芝居を見て、そのあいだに一度サーカスでも見物すれば、もうそれで十分だった。

彼がだれか隣の人と、名前と住居を取りかえてみたところで、そこにはなんの変化も起こるまいと思われるのだった。彼の心の奥底にひそんでいるのは、すぐれた力量や人格に対する、やすむことのない不信の念であつたし、また嫉妬から生じた本能的なものとして、ありとあらゆる非日常的なもの、自由なもの、品のよいもの、精神的なものに対する敵意であつたが、これもしかし、この町に住むほかのおやじ連と共通のものだった。

彼のことはもうこれくらいにしておこう。こういった平板な生活と、そうした生活につきものの無意識的な悲劇をえがきだすことは、深刻な皮肉屋にしかできないことである。ただこの男にはたった一人の息子があった。その子の話をしなければならぬのである。

ハンス・ギーベンラートは疑いもなく才能のある子供だった。ほかの子供たちといっしょになって駆けまわっていても、その姿を見れば、彼がどんなに繊細で特別な子であるかがすぐにわかった。シュヴァルツヴァルトのこの小さな町に、このような人間が育ったことは、ほかに例がなかった。せまるしい閉じこもった世界をこえて、広い目を持ち、広い作用をおよぼすような人間は、いままでこの町から出たことがなかったのである。まじめそうな日や、りこうそうな額、それに品のよい歩き方、そうしたものをこの少年がどこから得てきたものか、これはだれにもわからなかった。母親ゆずりでもあろうか？ 母親はもう何年かまえに死んでおり、生前目にたったことといえは、いつも病気がちでよくよしていたことだけである。父親の方はまるで問題にならなかった。とすれば、秘密にみちた火花が、ほんとうに天から、はじめてこの古い小さな町に落下してきたことになるわけである。この町は過去八百年から九百年にわたって、働きの町民をたくさん出してはいたが、ほんとう

に才能をもった人間とか天才となると、まだ一度も生み出したことがなかったからである。

現代的な観察者なら、病身の母親と、長いあいだ立派につづいてきた家系のこととを考えて、これはもう退化のはじまる兆候として、知性の過剰状態が生じたのだ、というかもしれない。しかし、幸いなことにこの町には、そういった現代式の人間は住んでいなかった。役人や教師のうちでも年の若い目先のきいた連中だけが、雑誌の論文を通じて、「現代的な人間」というものがあるのだと、うすうす感じているにすぎなかった。この町では、なにもツアラトウストラ（ニーチェが主著『ツアラトウストラ』の弁舌などは知らなくても、けっこう教養のある紳士として生きてゆけたのである。結婚生活はいずれも堅実で、幸福そのものといった場合もまれではなかった。生活全体が度しがたい古風な相貌をもっていたのだ。ぬくぬくとした、なにひとつ不足のない生活をおくっている町民のなかには、この二十年のあいだに、職工から工場主になりあがったものも少なくなかったが、こういった連中は役人のまえでは帽子をとり、すすんで交際をもとめるくせに、仲間同士のあいだでは、役人のことを素寒貧だの、書記の犬だのと呼ぶのだった。そのくせ奇妙なことに彼らは、自分たちの息子ができることなら大学にかよわせ、役人にしたいと念願して、それ以上の野心を知らなかつ

た。しかし残念ながら、これはいつまでたつても満たされない美しい夢にすぎなかった。息子たちはたいいていラテン語学校でさえもう青息吐息のありさまで、落第に落第をかされた末に、やっと進級できるといったありさまだったからである。

ハンス・ギーベンラートの天分については、疑う余地がなかった。先生たちも、校長も、隣近所の人々も、町の牧師も、同級生も、みんな口をそろえて、この少年が頭がよくて特別なできであることをみとめていた。そのために彼の将来ははっきり決められていたのである。というのも、シュヴァーベン地方では、両親が金持でないかぎり、天分のある子供たちにとっては、ただひとつのせまい道があるだけだった。州の試験にとおって神学校にはいり、神学校からテュービンゲン大学へとすすみ、そのテュービンゲン大学を出てから牧師か教師になるという道である。シュヴァーベン出身の少年が毎年四、五十人ずつ、静かで確実なこの道にはいっていった。堅信（暫いと信仰告白を行なう新教徒の成人式）礼をすませたばかりの、やせて勉強に疲れた少年たちが、州費で古典的教養のいろいろな分野を歩み、八年か九年ののちには、生涯の行路の後半にふみいるわけだが、たいいていは前半よりも長いこの後半の人生行路で、彼らはうけた恩恵を州に返済していかなければならないのである。

あと二、三週間もたてば、またこのいわゆる「州試験」が行なわれることになっていた。「国」が地方の若い逸材をえらびだすことになるこの毎年のいけにえ儀式は、「州試験」と呼ばれていたのである。そして、その期間には、試験の行なわれている州の首都に向かって、小さな町や村々から、数多くの家族の溜息やら、祈りやら、願望やらが発せられるのだった。

ハンス・ギーベンラートは、町がこのつらい苦しい競争におくりこもうと考えているたつた一人の候補者だった。その名譽は大きかったが、しかしこれはけっして無償で得られた名譽ではなかった。学校の授業は毎日四時までだったが、ひきつづきそのあと、校長先生のところでギリシア語の補講があった。それから六時には、町の牧師さんがわざわざ親切にもラテン語と宗教の復習をしてくれた。おまけにまた週に二回、夕食のあと一時間、数学の先生のところで指導をうけたのである。ギリシア語では不規則動詞について、不変化詞のうちに表現される文章結合の多様さに重点がおかれていたし、ラテン語では明瞭で簡潔な文体をつくり、特に韻律上のいろいろなニュアンスをわきまえることが大切だった。数学でもに力をそそいだのは、複雑な比例の問題だった。先生がたびたび言って聞かせたところによると、この比例の問題は、一見したところ今後の勉強や生活にとって、な

んの価値もないように見えるのだが、それはほんとうにただそう見えるだけの話なのであり、実際には非常に重要なもので、ほかの主要課目よりもっと重要ならいだった。なぜと云って、論理的な能力をやしない、明晰で飾りけのない効果的な思考能力の基礎となるのが、この比例だったからである。

しかし、こうつめこまれては精神的な負担がかちすぎでしまい、頭の訓練ばかりにかかりきって、心情の方がおろそかになり、ひからびてしまいう危険もなしとはしない、というわけでハンスは、毎朝学校のはじまる一時間まえに、堅信礼のための授業に出ることをゆるされていた。ブレンツ（十六世紀シユヴアーの宗教改革家）の宗教問答書をつかい、問答を暗記したり、暗誦したりして心をはげまし、若い者たちの魂に、宗教的な生活のさわやかな息吹きをふきこむといった授業である。しかし残念なことに、ハンスはこの氣ばらしの時間をみずからちぢめてしまい、その祝福を自分の手からうばい去ってしまった。というのも彼は、ギリシア語やラテン語の単語、あるいは練習問題などを書きこんだ紙片を、こっそりと自分の問答書のなかにいれておき、ほとんどその時間いっぱい、こうした世俗の学問に没頭していたからである。しかし、それにしても彼の良心はすっかり鈍ってしまっているわけではなかった。こっそりほかの勉強をしながらも、やるせな

い心の動揺と、ひそかな不安とをたえず感じていたのである。監督牧師さんがそばによってきたり、名前を呼んだりするたびに、彼はびくりとしたし、返答をしなければならぬようなときには、額に汗がにじみ、胸がどきどきするのだった。しかし彼の返答はまったく申し分のないものだったし、発音も正確無比だった。その点を牧師さんは大いに高く買っていたのである。

書いたり暗記したり、復習したり予習したりの宿題は、昼間の授業ごとにたまるので、それはそれでまた夜おそくなってから、親しげなランプの光のもとでかたづけなければならなかった。受持の先生に言わせると、家庭の平和というものに恵みふかくつまれたこうした静かな勉強は、特に効果があり、力のつき方も格段だということだったので、火曜日と土曜日はふつう十時ごろまでですんだが、他の日は十一時、十二時まで、ときにはもっとおそくまでつづくのだった。父親はランプの石油がやたらに減るので、すこし不平をならしはしたが、それでもこうした息子の勉強がたを、満足そうな誇りの氣持でながめていた。たまに暇な時間があるときと日曜日——これはわれわれの生活の七分の一を占めているのだ——には、学校では読んでいない二、三の著者の書いたものを読み、文法を復習するようというきついおすめだった。

「もちろんほどほどに、適度にやるんだ！ 一週に一、二度散歩に出かけるというのは必要なことだし、大いなききめもあることなんだよ。天氣がよければ、本をもっておもてに行くこともできるしね——おもてのさわやかな空氣にひたつていると、とてもらくに楽しくおぼえられるのがわかるよ。ともかくにも、元氣いっぱい上を向いてやることだ！」

というわけで、ハンスはできるだけ頭を高くあげて上を向き、その後は散歩も勉強のために利用した。そして、寝不足でやつれた顔をし、青いくまのできた疲れた目をして、おびえたような足どりでひっそりと歩きまわることだった。

「ギーベンラートはどうでしょう？ 通りますでしゅうね」と、受持の先生があるとき校長に聞いた。

「通るとも、通るとも」と、校長は歡声をあげるように言った。「あれはめったにいないりこうな子だよ。あの子の様子を見てごらん、まったくもって精神そのものといったところじゃないか」

最後の一週間には、この精神化が特に目立つのだった。かわいいやさしい童顔には、落ちくぼんで不安げな目が、くもった光をおびて燃えていたし、美しい額には、内部の精神の存在を示す細かいしわがびくびく動いていた。さなきだにやせた細い腕と手は、ボッチチェリの画面を

思わせる疲れた優美な様子でたれさがっていた。

いよいよという時がきた。明日の朝は父親といっしょにシュトゥットウガルトに行き、そこで州試験を受けて、神学校のせまい修道院の門をはいる資格があるかどうかをためすのだ。ちょうどハンスは、校長先生のところへ暇乞いに行ってきたところだった。

「今晚はもう勉強してはいけないよ」と、こわい校長先生がいつにないやさしさをこめて言った。「そう約束しなさい。明日は元氣いっぱいシュトゥットウガルトにのりこまなくちゃならないんだ。一時間ほど散歩してから早目に床につきなさい。若い者はよく眠らなくてはいいけない」

いろいろ山というほどの忠告を聞かされるだろうと恐れていたのに、こんなにやさしくされて、ハンスはびつくりし、ほっと胸をなでおろして校舎を出た。キルヒベルクの大きな菩提樹が、午後もおそくの暑い日ざしをうけて、ぼんやりと輝いていたし、町の中心の広場では、二つの大きな噴水が、びちゃびちゃ音をたてながらきらめいていた。不規則な家並みの線ごしには、近くの青ぐろい樅の山がのぞきこんでいた。少年は、こうしたものをもう長いあいだ見たことがなかったような気がしたし、なにもかもがひどく美しく魅惑的に思われるのだった。頭痛はしたが、でも今日はもう勉強する必要はなかった。

広場を横ぎつてぶらぶら歩いてゆき、古い役場の前を通りすぎて、市場通りをぬけ、刃物鍛冶のところから古い橋のたもとへと出た。そこでしばらくの間、あてどもなく行きつもとどりつしたあとで、ひろい欄干の上に腰をおろした。幾週間とも何ヵ月ともなく、毎日ここを日に四度も通り過ぎていながら、橋のたもとの小さなゴシツクの礼拝堂も、川も、水門も、堰も、水車も、彼の目にははいらなかったのだ。水浴びのできる川原や、柳の木のある川岸さえも目にはいらなかった。その岸へには皮なめし場がならんでおり、川も深く、緑色によんどんで湖のように見え、弓なりに曲がって尖った柳の枝が、水のなかにまでたれさがっているのだった。

今こうして思い出してみれば、幾たびここで半日かまる一日を過ごしたことだろう。幾たびここで泳ぎ、水にもぐり、ボートをこぎ、魚を釣ったことだろう。ああ、あの魚釣り！ これもいまはもうほとんど忘れてしまった。去年のことだったが、試験準備のために魚釣りを禁じられたときには、ずいぶんひどく泣きわめいたものだった。魚釣り！ 学校にかよった長い年月のうちで、これこそいちばん楽しいことだった。あわい柳の木かげにたたずんで、水車の堰の水音が、まぢかに聞こえるのを耳にする。深い静かな水！ そして水面にうつる光のたわむれ。長い釣竿がやわらかにたわむ。食いついてひっ

ばるときのあの興奮。そして、あのびちびちはねる、冷たい、はちぎれそうな魚を手にしたときの、なんとも言えない喜び！

生きのいい鯉を釣りあげたこともたびたびあったし、銀うぐいやにぐい、それに味のいいうぐいや美しい色をした小さなやなぎばえも釣ったのだった。長いこと彼は水の上を見おろしていた。そして、緑色によんだ川の一隅を見つめているうちに、もの思いにせずみ、悲しくなってきた。自由で荒っぽくて美しい少年の日の喜びが、いまは遠い昔のものとなってしまったのを彼は感じた。機械的な動作で、ポケットからパンのかけらを取りだすと、大きなたまや小さなたまをつくって水の中に投げこみ、それが沈んでいつて、ぱくりと魚に食われるさまをながめていた。はじめは小さな魚たちがやってきて、小さいかけらをむさぼり食い、大きなかけらは、いかにも食べたそうに、鼻づらでジグザグにこづいていた。それから、ゆっくりと用心ぶかそうに、大きめの銀うぐいが一匹近づいてきた。黒っぽい広い背は、水の底とあまり見わけがつかなかった。パンのたまのまわりを、ゆっくりひと回りをしたかと思うと、突然まるい口をあけて、それをのみこんでしまった。ものうい流れの水面からは、湿ったなま暖かいもやがたちのぼり、明るい雲が二つ三つ、ぼんやりと緑の水面に映っていた。水車小屋では丸

鋸^{のこぎり}がきしり、二つの堰^{せき}は、冷たい低い水音をまじえあっていた。少年はつい先ごろの堅信礼の日曜日のことを思い出した。その日、おごそかな儀式が行なわれてみんなが感動しているただなかで、彼は自分がこっそりとギリシア語の動詞を暗記しているのに気づき、はっとしたのだった。最近ではほかのときにも、自分の考えが入りみだれてしまうことがよくあった。学校でもいま目のまえにしている勉強がおるすになってしまい、もうすんでしまった勉強や、これからやる勉強のことを考えていることがしょっちゅうだった。でも試験はうまくゆくだろう！

ぼんやりと彼は立ちあがったが、どこへ行こうとも決しかねていた。突然力強い手が彼の肩をつかまえ、親しげな男の声が話しかけてきたので、彼はひどくおどろいた。

「こんばんは、ハンス、ちょっといっしょに歩かないかい？」

靴屋の親方のフライクだった。以前には、晩^{ばん}がたの一时间くらいを、時おりこの男のところで過ごしたものだ。だが、いまはもうそれも、とうになくなっていった。ハンスはいっしょに歩きながら、この信心ぶかい敬虔^{エビチヌ}派^ハ信^シ者の言うことを、あまり注意もせずに聞いていた。フライクは試験のことを話して、成功を祈って、少年を元気づけた。しかし、彼がほんとうに言おうとしたことは、結

局のところ試験などというものは外面的で偶然的なものだ、ということだった。落ちたって恥^{はにか}みやない、どんなにできる者だって落ちることがあるんだ、もしも万^{ばん}一^{いち}君^{きみ}が落ちたら、神さまはそれぞれの人にそれぞれ違った思^{おも}召^めしをもっておられ、各自が自分の道を行くように導^{みちび}いておられるのだ、ということを考えてほしい、ということだった。

ハンスはこの男に対して、いくらか後ろめたいところがあった。この男と、この男のしっかりした堂々たる態度に対しては、尊敬の念をおぼえていたが、決まった時間^{かん}にいつもお祈りをあげる信者たちについては、いろいろとひやかし半分の冗談^{じやうたん}が言われるのを耳にしていたし、それを聞いて、よく心にもなくいっしょになって笑ったことがあったのだ。それにまた彼は、自分の臆病^{おくびやう}さを恥^{はにか}じないわけにはいかなかった。というのも、この靴屋の親方がするどい質問をするので、それがこわさに、彼はしばらくまえからこの男をさけてきたのだ。彼が先生たちの自慢の種^{たね}となり、自分でもすこし得意になってきてからというものの、フライク親方はよく奇妙な様子で彼の顔をじつと見つめ、その慢心^{まんしん}をくじいてやろうとした。そのせいで少年の心はしだいにこの善意の指導者から離れてしまった。というのも、ハンスはいま少年らしい生意気^{しやうき}ざかりの年ごろで、すこしでも自尊心を傷つけるも

のに対しては、ひどく敏感な感受性をそなえていたからである。いま、こうして話をしている親方と並んで歩きながらも、彼はこの親方がどんなに心配し、好意をこめて自分のすがたを見おろしているかを知らないでいた。

クローネン通りで二人は町の牧師に出会った。親方は格式ばったひややかな挨拶^{あいさつ}をすると、急に先をいそぎだした。というのも、この牧師は新しがりやで、キリストの復活さえも信じていないという噂^{うわさ}がたっていたのである。牧師の方が少年と連れだって歩いた。

「どうだね？」と牧師はたずねた。「もうここまでできたからには、うれしいうらやう」

「ええ、せいせいしています」

「まあ、がんばるんだね！ みんな君に期待しているんだから。ラテン語はとくにいい成績をとってほしいね」「でも僕落ちたら」と、ハンスはおずおずしながら言った。

「落ちる?」牧師はびつくりして立ちどまった。「落ちるなんて、そんなことがあるものか。ありっこない！なんといいことを考えるんだ！」

「僕はただ、そういうこともありうると思ったただけなんです……」

「そんなことはあるものか、ハンス、ありえないことだ。ぜんぜん心配いらぬよ。じゃあ、お父さんよろしく」

元気をだすんだよ！」

ハンスは牧師の後ろすがたを見おくった。それから靴屋の親方の方をふりかえって見た。あの人はさつきなると言ったろう？ ラテン語なんか大して問題じゃない、心を正しくして神さまをうやまつてさえいけばいいのだって。なるほど口さきだけなら、なんとも言えるものだ。そこへもつてきて牧師さんの方は！ もしも試験に落ちたら、二度とふたたび牧師さんには顔を合わせられない。

胸苦しい思いをしながら彼はこっそりと家にもどリ、急な斜面になっている小さな庭にはいつていった。そこにはもう長いことつかっていない、朽ちたあずまやがあった。以前彼はそのなかに板小屋をこしらえて、三年間も兎^{うさぎ}を飼ったことがあった。去年の秋、試験準備のためだといって、この兎たちも取りあげられてしまった。氣ばらしのための時間なんか、もうなかったのだ。

この庭のなかに、もう長いことはいったことがなかった。中がからの板仕切りは、腐ってこわれかけており、壁のすみの鍾乳石^{ちゅうりつせき}のかたまりはくずれ、小さな木の水車が、曲がってくだけたまま水道管のそばにころがっていた。彼はこういうものを組みたてたりけずったりして、それを楽しんでいたころのことを思いだした。あれからもう二年たっている——遠い昔のことだ。彼は水車をと

りあげてひん曲げると、めちやめちやにこわしたあげく、垣根の向こうに投げすてた。こんなものはうっちゃつてしまえ、みんなもうとうにご用済みだ。そのときふと、学校友だちのアウグストのことが頭に浮かんた。水車をつくったり、兎小屋をなおしたりするのを手伝ってくれたのだ。午後彼ら二人は長いことここで遊んだものだった。投石器で石をとばしたり、猫を追いかけたり、テントをはったり、おやつに生のにんじんをかじったりしたのだ。それからしかし、くそ勉強がはじまった。アウグストも一年まえに学校をやめてしまい、機械職工の見習になってしまった。その後は二度しかすがたを見せなかった。もちろん彼の方でももう暇がなかったのだ。

雲の影がせわしく谷をこえて走り、太陽はもう山のふちに近づいていた。一瞬少年は身を投げだして泣きわめきたいような気持ちにおそわれた。それをおさえて、彼は馬車小屋から手斧をもちだし、かぼそい腕をふりあげて、兎小屋をこなみじんうちに砕いた。板つべらがちりぢりにとび、釘がきしんでひん曲がり、去年の夏いたままの腐った兎の餌がすこしばかり出てきた。彼はこうしたものを見なむちゃくちゃに打ちすえた。そうすれば、兎やアウグストや、昔の子供じみた遊びに対する郷愁を、うちころすことができるでもないった調子だった。

「や、や、や、や、や、そりやまたなんとしたことだ？」

と、父親が窓からさげんだ。「そこでなにをしてるんだ？」

「たきぎだよ」

返事はそれきりで、斧を投げすてると、彼は中庭から往米にかけだし、川の岸を上流に向かって歩いていった。醸造所のそばに、筏が二つつないであつた。こういう筏にのつて、以前は何時間となく川をくだつていったものだった。暑い夏の午後など、材木の間でびちゃびちゃ音をたてている水の上をすべってゆくと、興奮もすればまた逆に眠くもなるのだった。ゆるんで浮かんでいる材木の上にとびのると、彼はつみ重ねた柳の枝の上に身をよこたえて、いまこの筏は川を流れてゆく途中なのだと思おうとした。牧草地や畑や村や、涼しい森のふちを通り過ぎ、橋の下やひき上げた水門の下もぐりぬけて、あるいは早く、あるいはおそく筏は進んでゆく、自分はその上に寝ているけれども、なにもかもがまた昔のようになつて、カップフベルクに兎の餌をとりに行き、川岸の皮なめし場で釣りをして、頭痛もしなければ心配もなかったころとおなじになつたのだ、と思うようにつとめた。疲れて不機嫌になつて彼は夕食に帰つてきた。明日はもうシュトゥットウガルトへ試験を受けに行くというので、父親はやたらに興奮して、本は包んだか、黒い服の支度はできたか、途中で文法を読むつもりはないか、気

分はいいか、などと十べんもたずねるのだった。ぶつきらぼうな棘のある返事をしただけで、ハンスはわずかなものを口にしていると、すぐにおやすみなさいを言った。

「おやすみ、ハンス。よく眠るんだよ！　じゃあ明日は六時に起こすからね。字ん引きも忘れてないだろうな？」

「うん、字ん引きは忘れてないよ。おやすみなさい」

小さい自分の部屋で、彼はなお長いことあかりをつけずに起きていた。受験準備がはじまってからというもの、この部屋だけが、いままで彼に与えられた唯一の恩恵だった——小さいながらも自分の部屋であり、ここにいれば自分が主人で、だれにも邪魔されなかった。ここで彼は、疲れと眠気と頭痛とたたかいながら、夜おそくまでシーザーやクセノフォン（ギリシアの軍人、歴史家。ソクラテスの門人で、哲学、歴史に関する著作が多い）や文法や字引や数学の問題と取りくみ、ねばりづよく、負けぬ気で、功名心にかりたてられていたのだが、それでもしかしほとんど絶望的になったこともよくあった。が同時にまた、失われた子供らしい楽しみよりも、もっと価値のある数時間をすごしたのもやはりここだった。誇りと陶醉と勝利の感激にみちあふれた、夢のようにふしぎな数時間だった。そういうとき彼は、学校のように、なにもかもすべてを忘れて、夢とあこがれの翼にのり、一段と高いものの圏内にひたるのだった。すると、あるあつかましい幸福な予感が彼をとらえて、ほんとうに自

分はほったのふくれたお人よしの同級生などとは別種のすぐれた人間であって、いつかはこの連中を、はるかな高みから悠然と見おろせるようになるだろう、と感じるのだった。いまでも彼は、この部屋には一段と自由で涼しい空気があるかのように、深く息をつき、ベッドに腰をかけて、夢と願望と予感のうちにひたりながら、ぼんやりと数時間をすごした。明るいまぶたが、勉強に疲れた大きな目の上に、しだいにたれさがつてきた。もう一度その目は開いたが、まばたきするとまた閉じられてしまった。青白い少年の頭は、やせた肩の上におちかかり、かぼそい両腕が、ぐったりとのびきった。彼は着物をきたまま眠りこんでしまっていた。母親のようにやさしい、ひそやかなまどろみの手が、不安にさかまく少年の胸の波をしずめ、美しい額に浮かんだ、小さなしわを消し去った。

前代未聞のことだった。朝早いというのに、校長先生がわざわざ自分で停車場まで来てくれた。ギーベンラー氏は黒のフロックコートをきて、興奮と喜びと得意さのあまり、すこしも立ちどまっていられなかった。校長やハンスのまわりを、神経質にちょこちょこ歩きまわり、駅長や駅員一同から、どうぞ道中ご無事で、息子さんが試験にうまく通りますように、と言われて、こわば